

七十六年は新年の初めから、

中国大陸の出来事が世界の注目を集めた。その第一は、中国ナ

ンバー2の周恩来の死（一月）

であり、それにもなう毛沢東

の独裁的権力の確立、つづいて

走資派批判、そして劇的な民衆

による毛政権への公然たる反抗

を意味する天安門事件および鄧

小平の失脚・華国鋒の登場（四

月）などの重要事件が相次いだ。

しかも、ごく最近にいたっては、

もはや毛主席は外国の賓客とは

会見しないことが党中央の決定

として発表され、ポスト毛がい

よいよ近づいたことがとり沙汰

されている。毛政権を引き継ぐ

人物は果たして誰か。その人物

は文革派からか、実権派からか。

また軍部実力者はどうか。さら

にそれにもなう中国とソ連お

よび米国との関係はどうなる

か。

中国問題はその性質上推量の

部分が多く、見解はさまざまに

分かれているのが現状である。

誰であっても大陸内部の真実を

あからさまに述べ、確言するこ

とは困難である。しかし、情勢

を的確に把握し、分析すること

によって、根本的な流れを見極

めることは可能である。

本書はそういう意味で、中国

情勢を正しく知るための好著と

いえよう。とくに、この問題の

専門家として著名な桑原寿二

氏、柴田穂氏、中嶋嶺雄氏の三

者が中心となって、他に七人の

論客をまじえながら、中国の現

深い。

柴田氏が周恩来および実務

派の力を高く評価し、文革派の

力を軽視する立場をとるのに対

し、桑原氏は毛存命中という条

ヤンペーンの後では副首相にな

るのもむずかしい（桑原）、「首

相にはなりにくくなったが、完

全失脚、再起不能にはならない

（柴田）、「このまま鄧小平が

失脚したが、それぞれの見解の

背景をなす論拠は、中国問題を

考える上でその是非以前に知っ

ておく必要があるといえよう。

現在、米中接近がささやかれ、

中ソ問題、台湾問題の推移など

目下進行中の課題に対しても、

中国大陸の情勢の成り行きが大

きな力ギを握る形になってい

る。

そういう中であって、十分説

みごたえのある中国問題の分析

書であるといえよう。

（西）

（ダイヤモンド・タイムス社

一二〇〇円）

中国問題に深い分析

神谷 不二ら十人著

毛沢東最後の挑戦

状を座談会形式で分析し、毛沢

東以後までも展望しているが、

それぞれが見解の相違点をぶつ

け合って、その論拠を述べ合っ

て自説を主張している点は興味

件つきで、文革派の力が大きい

ことを主張、意見が対立した。

また、鄧小平の問題においても、

「鄧小平はもちろん首相にはな

れないし、このような猛烈なキ

失脚するということはないので

はないか、という説に賭ける」

（中嶋）というように大胆な推

論が行われている。結果的には、

四月の天安門前事件で鄧小平は